



第十九條第二項ヲ削ル

第十九條ノ二 社債ノ總額ヲ數回ニ分チ發行スル場合ニ於テハ信託證書ニハ前

條第三號乃至第八號ニ掲ケタル事項ニ代ヘ左ノ事項ヲ記載スヘシ

一 社債ノ總額ヲ數回ニ分チ發行スル旨ノ表示

二 社債ノ利率ノ最高限度

信託契約ニ於テ第一回又ハ其ノ後ニ發行スル社債ニ付發行金額及前條第三號乃至第八號ニ掲ケタル事項ヲ定メタルトキハ其ノ事項ヲモ記載スヘシ

第十九條ノ三 社債ノ總額ヲ數回ニ分チ發行スル場合ニ於テ信託契約ニ前條第一項ノ事項ヲ定メタルトキハ其ノ事項ヲモ記載スヘシ

第十九條ノ四 前條第一項ノ契約ハ委託會社及受託會社ノ代表者ノ署名シタル書面ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

第十九條ノ五 各社債ノ金額ハ社債ノ總額ニ付均一ナルカ又ハ最低額ヲ以テ整除シ得ヘキモノナルコトヲ要ス

第二十二條第一項第一號及第四號中「第十九條第一項」ヲ「第十九條」ニ改メ同項

第四號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ  
四ノ二 受託會社カ擔保ノ價格ニ付調

### 查シタル結果ノ表示

同條第二項ヲ左ノ如ク改ム

社債カ其ノ總額ヲ數回ニ分チ發行スルモノナル場合ニ於テハ前項ニ掲ケタル事項ハ其ノ回ニ發行スル社債ニ關スルモノトス

第十九條第三號乃至第七號ニ掲ケタル事項ハ其ノ回ニ發行スルモノアルトキハ委託會社ハ受託會社トノ契約ヲ以テ社債ノ總額ヲ既ニ發行シタル額ニ至ルマテ減額スルコトヲモノトス

一 社債ノ總額ヲ數回ニ分チ發行スル旨ノ表示及其ノ回ノ發行金額

二 既ニ發行ニ係ル毎回ノ金額、其ノ未償還額並未償還額ノ利率及償還期限

三 其ノ回ノ發行ニ付第十九條ノ四第一項ノ契約證書アルトキハ其ノ證書ノ表示

四 前項ニ掲ケタル契約證書若ハ其ノ賛本ヲ應募者ノ閱覽ニ供スヘキ時及場所

前項ノ契約ハ信託契約ト同一ノ效力ヲ有ス

第十九條ノ四 前條第一項ノ契約ハ委託會社及受託會社ノ代表者ノ署名シタル書面ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

第十九條ノ五 各社債ノ金額ハ社債ノ總額ニ付均一ナルカ又ハ最低額ヲ以テ整除シ得ヘキモノナルコトヲ要ス

第二十二條第一項第一號及第二十二條第二項第一項」ヲ「第二十二條」ニ改メ同條ニ左ノ一項ヲ加フ

第三十條ニ左ノ一項ヲ加フ  
前條第一項ニ依リ第三者カ社債ノ總額ヲ引受ケタル場合ニ於テハ其ノ第三者

第十九條ノ五 各社債ノ金額ハ社債ノ總額ニ付均一ナルカ又ハ最低額ヲ以テ整除シ得ヘキモノナルコトヲ要ス

第二十二條第一項第一號及第四號中「第十九條第一項」ヲ「第十九條」ニ改メ同項

第四號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ  
四ノ二 受託會社カ擔保ノ價格ニ付調

ノ發行ハ信託證書作製ノ日ヨリ五年内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

第三十一條ノ三 社債ノ總額ヲ數回ニ分チ發行スル場合ニ於テ未タ發行セサルモノアルトキハ委託會社ハ受託會社トノ契約ヲ以テ社債ノ總額ヲ既ニ發行シタル額ニ至ルマテ減額スルコトヲモノトス

二ノ二 社債カ其ノ總額ヲ數回ニ分チ發行スル場合ニ於テ未タ發行セサルモノアルトキハ委託會社ハ正當ノ事由ナクシテ契約ノ締結ヲ拒ムコトヲ得ス

前項ノ契約ノ締結ニ因リ受託會社ノ受ケタル損害ハ委託會社之ヲ賠償スルコトヲ要ス

第十九條ノ三 第二項及第七十七條ノ規定ハ第一項ノ契約ニ之ヲ準用ス

第三十三條ノ二 社債ノ總額ヲ數回ニ分チ發行スル場合ニ於テハ其ノ各回ノ發行金額ノ引受ヲ以テ社債ノ總額ノ引受トス

第十九條ノ三 第二項及第七十七條ノ規定ハ第一項ノ契約ニ之ヲ準用ス

第三十四條中「商法第二百四條第二項」ヲ「商法第二百四條ノ三第一項」ニ、同條第一號中「第十九條第一項」ヲ「第十九條」ニ改メ同條ニ左ノ一項ヲ加フ

第三十四條中「商法第二百四條ノ三第一項」ニ、同條第一號中「第十九條第一項」ヲ「第十九條」ニ改メ同條ニ左ノ一項ヲ加フ

第十九條ノ四第一項ノ契約證書アルトキ  
ハ其ノ證書ニ改ム

第一百十九條ニ左ノ一項ヲ加フ

前項ノ場合ニ於テ社債カ其ノ總額ヲ數

回ニ分チ發行スルモノナルトキハ不動產

登記法第百十六條又ハ第百十七條ノ規

定ニ拘ラス申請書ニハ社債ノ總額、社債

ノ總額ヲ數回ニ分チ發行スル旨ノ表示及

社債ノ利率ノ最高限度ヲミヲ記載スヘシ

第一百十九條ノ二 信託契約ニ依ル物上擔

保附社債カ其ノ總額ヲ數回ニ分チ發行

スルモノナル場合ニ於テ社債ヲ發行シ

タルトキヘ其ノ回ノ發行金額ニ付引受

又ハ募集ノ完了シタル日ヨリ二週間内

ニ其ノ回ノ發行金額及其ノ回ノ社債ニ

關スル第十九條第五號乃至第七號ニ掲

ケタル事項ヲ登記スヘシ

商法第二百四條ノ三第三項ノ規定ハ前

項ニ規定スル登記ノ期間ニ之ヲ準用ス

第一項ノ登記ハ其ノ社債ヲ擔保スル權

利ノ登記ニ附記シテ之ヲ爲ス

#### 附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

鐵道抵當法第三十條ノ次ニ左ノ一條ヲ加

フ

第三十二條ノ二 擔保附社債信託法ニ依

リ社債ノ總額ヲ數回ニ分チ發行スル場

合ニ於ケル抵當權設定ノ登錄ハ鐵道抵

當原簿ニ左ノ事項ヲ記載スルニ依リテ

之ヲ爲ス此ノ場合ニ於テハ前條第二項  
ノ規定ヲ準用ス

○國務大臣（小山松吉君）只今議題トナリ

（國務大臣小山松吉君演壇ニ登ル）

樺太地方鐵道補助法中改正法律案

右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議

院法第五十四條ニ依リ及送付候也

一 第七條第二項第一號乃至第三號ニ  
掲ケタル事項

二 社債ノ總額

三 社債ノ總額ヲ數回ニ分チ發行スル  
旨ノ表示

四 社債ノ利率ノ最高限度

五 前條第一項第二號乃至第五號ニ掲  
ケタル事項

マシタル擔保附社債信託法中改正法律案、  
提出ノ理由ヲ御説明申上ゲマス、經濟界ノ  
實情ニ鑑ミマスルニ、擔保附社債ニ依ル事  
業資金調達ノ方法ハ、近年著シキ發達ヲ遂  
ゲツツアリマスル所、現行法タル擔保附社

貴族院議長公爵德川家達殿  
衆議院議長 秋田 清

樺太地方鐵道補助法中改正法律案

樺太地方鐵道補助法中左ノ通改正ス

第一條及第二條中「十年」ヲ「十五年」ニ改

ム

本法へ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

（國務大臣永井柳太郎君演壇ニ登ル）

○國務大臣（永井柳太郎君）只今議題トナ

リマシタ、樺太地方鐵道補助法中改正法律

案、提出ノ理由ヲ説明イタシタトイ存ジ

マス、現在樺太ニ於キマシテ補助中ノ地

方鐵道ハ、何レモ營業開始後日尙ほ淺ク、

殊ニ近年經濟界ノ不況ニ伴ヒマシテ、其營

業成績未ダ良好ナラザルモノガアリマスノ

デ、將來人口ノ増加及產業ノ發展等ヲ考慮

ニ入レマシテモ、尙ホ當分獨立自營ノ時期

ニ達シ得ナイモノガアルノデゴザイマスノ

デ、現在ノ補助期間ノ經過後モ、尙ホ補助

ヲ繼續スルノ必要ガアルト認メマスノデ、

此際右補助期間ノ限度十箇年ヲ、十五箇年

ニ改正イタシ、以テ樺太ニ於ケル地方鐵道

ノ健全ナル發達ヲ期シタイト存ジマス、其

爲ニ本法律案ヲ提出イタシマシタ次第デゴ

ザイマス、何卒御審議ノ上御協賛ヲ賜ハラ

ムコトヲ希望イタシマス

○議長（公爵徳川家達君）本案ハ大正二年

法律第九號中改正法律案ノ特別委員ニ併託

イタシマス

○議長（公爵徳川家達君）本案ハ大正二年

法律第九號中改正法律案ノ特別委員ニ併託

イタシマス

貴族院議長公爵徳川家達殿  
衆議院議長 秋田 清

樺太地方鐵道補助法中改正法律案

第一條及第二條中「十年」ヲ「十五年」ニ改

ム

本法へ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

（國務大臣永井柳太郎君）只今議題トナリ

樺太地方鐵道補助法中改正法律案

第一條及第二條中「十年」ヲ「十五年」ニ改

ム

</

敷設法中改正法律案外四件ノ特別委員ニ付  
託セラレムコトヲ望ムト云フ動議ヲ提出イ  
タシマス

○子爵清岡長吉君 賛成

○議長(公爵徳川家達君) 池田子爵ノ動議  
ニ御異存ゴザイマセヌカ  
「異議ナシ」ト呼フ者アリ

○議長(公爵徳川家達君) 御異議ナイト認  
メマス

○議長(公爵徳川家達君) 日程第一、恩給  
法中改正法律案、政府提出、衆議院送付、  
第一讀會

○議長(公爵徳川家達君) 恩給法中改正法律案  
右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議  
院法第五十四條ニ依リ及送付候也

恩給法中改正法律案  
右政府提出案本院ニ於テ可決セリ因テ議  
院法第五十四條ニ依リ及送付候也

昭和八年三月九日

衆議院議長 秋田 清

貴族院議長公爵徳川家達殿

恩給法中改正法律案  
恩給法中左ノ通改正ス

第二條中「增加恩給」ノ下ニ「傷病年金」  
ヲ加フ

第六條中「又ハ增加恩給」ヲ「增加恩給又  
超ユル」ニ改ム  
同條ニ左ノ一項ヲ加フ  
在職中ノ職務ニ關スル犯罪(過失犯ヲ  
除ク)ニ因リ禁錮以上ノ刑(陸軍刑法又  
ハ海軍刑法ニ依ル一年未滿ノ禁錮ノ刑  
ヲ含マス)ニ處セラレタルトキハ其ノ權

利消滅ス但シ其ノ在職力普通恩給ヲ受  
ケタル後ニ爲サレタルモノナルトキハ

其ノ再在職ニ因リテ生シタル權利ノミ  
ニ依リ年金タル恩給ヲ受クルノ權利ヲ  
有スル者ニ付其ノ權利ノ存否ヲ調査ス  
スコトヲ得ス

第十六條第二項ニ左ノ但書ヲ加フ  
但シ公務傷病ノ程度ニ付テハ出訴ヲ爲  
スコトヲ得ス

第十七條第一項中「前條第一號、第二號又  
ハ第四號ニ掲タル公務員若ハ之ニ準ス  
キ者ノ在職年中」ヲ「前條第一號、第二號  
若ハ第四號ニ掲タル公務員若ハ之ニ準ス  
ヘキ者ノ在職年又ハ第五號若ハ第六號ニ  
掲タル公務員ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受ク  
ルモノノ在職年中」ニ、同條第四項中「第  
四號若ハ第五號」ヲ「第五號若ハ第六號」  
ニ改ム

第三十條中「軍人ノ恩給權」ヲ「軍人又ハ  
警察監獄職員ノ恩給權」ニ、「十一年ニ達  
スル迄」ヲ「准士官以上ノ軍人ニ付テハ十  
三年ニ達スル迄、下士官以下ノ軍人及警  
察監獄職員ニ付テハ十二年ニ達スル迄」  
ニ「四分ノ三」ヲ「十分ノ七」ニ改ム

第三十一條 削除

第三十九條第一項中「半月」ヲ「三分ノ一  
月」ニ改メ同項ノ末尾ニ左ノ如ク加フ  
一年以上引續キ編隊艦船ニ乗シテ上陸  
制限ノ下ニ準戰訓練ニ服シタルトキ亦  
同シ

第十八條第一項中「百分ノ一」ヲ「百分ノ  
二」ニ改メ「府縣費ヨリ俸給ヲ給スル文  
官」ノ下ニ「神宮司廳又ハ神宮皇學館ノ  
幼稚園若ハ」ニ、「府縣立」ヲ「道府縣立」  
ニ改ム

第二十二條第一項中「學校若ハ」ヲ「學校、  
職員タル文官」ヲ加フ

第六條中「又ハ增加恩給」ヲ「增加恩給又  
超ユル」ニ改ム  
同條ニ左ノ一項ヲ加フ  
在職中ノ職務ニ關スル犯罪(過失犯ヲ  
除ク)ニ因リ禁錮以上ノ刑(陸軍刑法又  
ハ海軍刑法ニ依ル一年未滿ノ禁錮ノ刑  
ヲ含マス)ニ處セラレタルトキハ其ノ權

感化院職員及矯正院職員

第二十六條第二號ニ左ノ但書ヲ加フ  
但シ下士官准士官以上ノ軍人ト爲リタ  
ルトキハ普通恩給ニ付テノ最短恩給年  
限ノ計算ニ關シテハ之ヲ退職ト看做ス  
ヘシ

第十九條ノ二 裁定官廳ハ勅令ノ定ムル所  
ニ依リ年金タル恩給ヲ受クルノ權利ヲ  
有スル者ニ付其ノ權利ノ存否ヲ調査ス  
スコトヲ得ス

第十九條ノ二 裁定官廳ハ勅令ノ定ムル所  
ニ依リ年金タル恩給ヲ受クルノ權利ヲ  
有スル者ニ付其ノ權利ノ存否ヲ調査ス  
スコトヲ得ス

第二十八條第二項但書ヲ左ノ如ク改ム  
但シ一時恩給又ハ第八十二條ニ規定ス  
ル一時扶助料ノ基礎ト爲ルヘキ在職年  
ニ付テハ前ニ一時恩給ノ基礎ト爲リタ  
ル在職年其ノ他ノ前在職年ノ年月數ハ  
之ヲ合算セス

第三十條中「軍人ノ恩給權」ヲ「軍人又ハ  
警察監獄職員ノ恩給權」ニ、「十一年ニ達  
スル迄」ヲ「准士官以上ノ軍人ニ付テハ十  
三年ニ達スル迄、下士官以下ノ軍人及警  
察監獄職員ニ付テハ十二年ニ達スル迄」  
ニ「四分ノ三」ヲ「十分ノ七」ニ改ム

第三十一條 削除

第三十九條第一項中「半月」ヲ「三分ノ一  
月」ニ改メ同項ノ末尾ニ左ノ如ク加フ  
一年以上引續キ編隊艦船ニ乗シテ上陸  
制限ノ下ニ準戰訓練ニ服シタルトキ亦  
同シ

第四十條ノ二 休職、待命、歸休、停職  
其ノ他現實ニ職務ヲ執ルヲ要セサル在  
職期間ニシテ一月以上ニ瓦ルモノハ勅  
令ノ定ムル所ニ依リ在職年ノ計算ニ於  
テ之ヲ半減ス

第四十一條第三號中「六年未滿」ヲ「二年  
以下」ニ改ム

同條中第四號ヲ第五號、第五號ヲ第六號  
トシ第三號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ

第四十二條第二號ヲ左ノ如ク改ム  
同條第三項中「學校」ヲ「學校又ハ幼稚  
園」ニ改ム

第四十三條第二項中「第四十一條」ヲ「第  
四十條ノ二及第四十一條」ニ、「前條第一  
項第二號乃至第四號」ヲ「前條第一項」ニ  
改ム

第四十四條第二項中「第四十一條」ヲ「第  
四十條ノ二及第四十一條」ニ、「前條第一  
項第二號乃至第四號」ヲ「前條第一項」ニ  
改ム

第四十五條第一項中「百分ノ一」ヲ「百分ノ  
二」ニ改メ「府縣費ヨリ俸給ヲ給スル文  
官」ノ下ニ「神宮司廳又ハ神宮皇學館ノ  
幼稚園若ハ」ニ、「府縣立」ヲ「道府縣立」  
ニ改ム

第四十六條第一項中「百分ノ一」ヲ「百分ノ  
二」ニ改メ「府縣費ヨリ俸給ヲ給スル文  
官」ノ下ニ「神宮司廳又ハ神宮皇學館ノ  
幼稚園若ハ」ニ、「府縣立」ヲ「道府縣立」  
ニ改ム

第四十七條第一項中「百分ノ一」ヲ「百分ノ  
二」ニ改メ「府縣費ヨリ俸給ヲ給スル文  
官」ノ下ニ「神宮司廳又ハ神宮皇學館ノ  
幼稚園若ハ」ニ、「府縣立」ヲ「道府縣立」  
ニ改ム

第四十八條第一項中「百分ノ一」ヲ「百分ノ  
二」ニ改メ「府縣費ヨリ俸給ヲ給スル文  
官」ノ下ニ「神宮司廳又ハ神宮皇學館ノ  
幼稚園若ハ」ニ、「府縣立」ヲ「道府縣立」  
ニ改ム

第四十九條第一項中「百分ノ一」ヲ「百分ノ  
二」ニ改メ「府縣費ヨリ俸給ヲ給スル文  
官」ノ下ニ「神宮司廳又ハ神宮皇學館ノ  
幼稚園若ハ」ニ、「府縣立」ヲ「道府縣立」  
ニ改ム

ノ時ヲ含ム引續キタル在職年月數  
ハ一年以上ノ禁錮ノ刑ニ處セラレ又  
ハ其ノ他ノ法令ニ依リ禁錮以上ノ  
刑ニ處セラレタルトキハ其ノ犯罪

傷病年金ヲ給ス

前條第二項及第三項ノ規定ハ前項ニ規定

定スル條件(傷病ノ程度ヲ除ク)ヲ具備

スル者ニシテ退職當時ノ傷病ノ程度カ

前項ノ勅令ニ定ムル程度ニ達セサリシ

モノノ傷病年金ニ付之ヲ準用ス

前條第四項ノ規定ハ前二項ノ規定ニ依

リ給スヘキ傷病年金ニ付之ヲ準用ス

傷病年金ハ之ヲ普通恩給又ハ一時恩給

ト併給スルヲ妨ケス

第四十七條中「前條」ヲ「前二條」ニ改ム

第四十九條第二項中「及公務傷病」ニ因ル

不具癡疾ノ程度ヲ「公務傷病」ニ因ル不具

癡疾ノ程度及傷病年金ヲ給スヘキ傷病ノ

程度」ニ改ム

第五十條ニ左ノ一項ヲ加フ

前二項ノ規定ハ傷病年金ノ裁定ヲ爲ス

場合ニ付之ヲ準用ス

第五十一條第二項中「第四號但書」ヲ「第

二號但書及第四號但書」ニ改ム

第五十五條ノ二 前二條中增加恩給ノ改

定ニ關スル規定ハ傷病年金ヲ受クル者

再就職シ再就職後公務ノ爲傷痍ヲ受ケ

又ハ疾病ニ罹リ退職シ增加恩給又ハ傷

病年金ヲ受クヘキ場合ニ付之ヲ準用ス

第五十六條中「前一條」ヲ「前三條」ニ改ム

第五十七條中「前三條」ヲ「前四條」ニ改ム

第五十八條第一項第一號中「兵卒」ヲ「兵」

ニ、同項第二號中「六年未滿」ヲ「二年以

下」ニ改ム

同條第一項ニ左ノ二號ヲ加フ

三 之ヲ受クル者三十五歳ニ満ツル月

迄ハ普通恩給ノ六分ノ一、三十五歲

以上四十歳ニ満ツル月迄ハ普通恩給

ノ八分ノ一ヲ停止ス但シ增加恩給又

ハ傷病年金ト併給セラル場合ニハ

之ヲ停止セス

四 恩給年額千圓以上ニシテ其ノ恩給

外ノ所得ノ年額五千圓ヲ超ユルトキ

ハ恩給年額ト恩給外ノ所得ノ年額ト

ノ合計額ノ六千圓ヲ超ユル額ニ二割

ニ相當スル金額ヲ停止ス但シ恩給ノ

支給額年額千圓ヲ下ラシムルコトナ

ク其ノ停止年額ハ恩給年額ノ二割ヲ

超ユルコトナシ

同條第一項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

前項第四號ノ所得ノ範圍及計算方法並

停止方法ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

（軍人及準軍人ニ在リテハ各階等ニ付

定メラレタル別表第一號表ノ假定俸給

額ヲ以テ其ノ階等ニ對スル俸給額ト

ス）ノ總額ヲ謂フ但シ左ノ特例ニ從フ

リ之カ爲退職シ又ハ死亡シタル者ニ

付退職又ハ死亡ノ際昇給アリタルト

キハ其ノ爲サレタル昇給ノ中級俸ノ

定アルモノ（軍人及準軍人ニ付テハ

別表第一號表ノ假定俸給額ヲ以テ級

俸トス）ニ付テハ一級、其ノ定ナキ

モノニ付テハ昇給前ノ俸給ノ百分ノ

相當スル金額ヲ國庫ニ納付ス

朝鮮、臺灣又ハ樺太以外ノ地ニ於ケル公

立ノ小學校、實業補習學校、幼稚園、盲

學校、聾啞學校及小學校ニ類スル各種

學校ノ教育職員ハ其ノ學校又ハ幼稚園

ノ所在地ヲ管轄スル府縣又ハ之ニ準ス

ヘキ地方經濟ニ對シ其ノ俸給（又ハ給

料）ノ百分ノ一ニ相當スル金額ヲ納付

スヘシ

警察監獄職員ハ之ニ俸給ヲ給スル國

庫、府縣其ノ他ノ經濟ニ對シ毎月其ノ

俸給（又ハ給料）ノ百分ノ一ニ相當スル

金額ヲ納付スヘシ

待遇職員ハ之ニ俸給ヲ給スル國庫、府

縣其ノ他ノ經濟ニ對シ毎月其ノ俸給

（又ハ給料）ノ百分ノ二ニ相當スル金額

ヲ納付スヘシ

第二章第二節中第六十條ノ前ニ左ノ一條

ヲ加フ

第五十九條ノ二 本節ニ於テ退職前ノ俸

給年額ト稱スルハ退職前一年内ノ俸給

（軍人及準軍人ニ在リテハ各階等ニ付

定メラレタル別表第一號表ノ假定俸給

額ヲ以テ其ノ階等ニ對スル俸給額ト

ス）ノ總額ヲ謂フ但シ左ノ特例ニ從フ

リ之カ爲退職シ又ハ死亡シタル者ニ

付退職又ハ死亡ノ際昇給アリタルト

キハ其ノ爲サレタル昇給ノ中級俸ノ

定アルモノ（軍人及準軍人ニ付テハ

別表第一號表ノ假定俸給額ヲ以テ級

俸トス）ニ付テハ一級、其ノ定ナキ

モノニ付テハ昇給前ノ俸給ノ百分ノ

相當スル金額ヲ國庫ニ納付ス

准士官以上ノ軍人在職年十三年以上ニ

シテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ

給ス

前項ノ規定ハ第二十一條第二項第一號

ノ準軍人在職年十三年以上ニシテ退職

シ且其ノ身分ヲ免セラレタル場合ニ付

之ヲ準用ス

前二項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十三

年以上十四年未滿ニ對シ退職前ノ俸給

年額ノ百五十分ノ五十二ニ相當スル金額

トシ十四年以上一年ヲ増ス每ニ其ノ一

年ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分

ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額ト

前二項ニ規定スル退職前一年内ノ俸給ノ算出方法ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
實在職期間一年未滿ナルトキハ其ノ俸給ヲ月數ノ割合ニ依リ一年分ニ換算ス  
第六十條中「十五年」ヲ「十七年」ニ、「十六年」ヲ「十八年」ニ、「在職年五年」ヲ「在職年七年」ニ、「退職當時」ヲ「退職前」ニ改ム  
同條第六項中「第一號若ハ第三號」ノ下ニ「第五十五條ノ二」ヲ加フ  
第五十九條ノ二 本節ニ於テ退職前ノ俸給年額ト稱スルハ退職前一年内ノ俸給（軍人及準軍人ニ在リテハ各階等ニ付定メラレタル別表第一號表ノ假定俸給額ヲ以テ其ノ階等ニ對スル俸給額トス）ノ總額ヲ謂フ但シ左ノ特例ニ從フリ之カ爲退職シ又ハ死亡シタル者ニ付退職又ハ死亡ノ際昇給アリタルトキハ其ノ爲サレタル昇給ノ中級俸ノ定アルモノ（軍人及準軍人ニ付テハ別表第一號表ノ假定俸給額ヲ以テ級俸トス）ニ付テハ一級、其ノ定ナキモノニ付テハ昇給前ノ俸給ノ百分ノ相當スル金額ヲ國庫ニ納付ス准士官以上ノ軍人在職年十三年以上ニシテ退職シタルトキハ之ニ普通恩給ヲ給ス  
前項ノ規定ハ第二十一條第二項第一號ノ準軍人在職年十三年以上ニシテ退職シ且其ノ身分ヲ免セラレタル場合ニ付之ヲ準用ス  
前二項ノ普通恩給ノ年額ハ在職年十三年以上十四年未滿ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ五十二ニ相當スル金額トシ十四年以上一年ヲ増ス每ニ其ノ一年ニ對シ退職前ノ俸給年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ加ヘタル金額ト  
前條第六項ヲ左ノ如ク改ム  
陸海軍准士官ニシテ其ノ官ニ二年以上



(乙)

階等	准士官		下士官	兵
	特任官	准士官		
一等	同上	同上	同上	陸軍上等兵 海軍一等兵 陸軍二等兵 海軍二等兵 海軍三等兵 海軍四等兵
二等	同上	同上	同上	陸軍上等兵 陸軍一等兵 陸軍二等兵
三等	同上	同上	同上	海軍一等兵 海軍二等兵 海軍三等兵 海軍四等兵
四等	同上	同上	同上	海軍一等兵 海軍二等兵 海軍三等兵 海軍四等兵
五等	同上	同上	同上	海軍一等兵 海軍二等兵 海軍三等兵 海軍四等兵
六等	同上	同上	同上	海軍一等兵 海軍二等兵 海軍三等兵 海軍四等兵
七等	同上	同上	同上	海軍一等兵 海軍二等兵 海軍三等兵 海軍四等兵
八等	同上	同上	同上	海軍一等兵 海軍二等兵 海軍三等兵 海軍四等兵
九等	同上	同上	同上	海軍一等兵 海軍二等兵 海軍三等兵 海軍四等兵
十等	同上	同上	同上	海軍一等兵 海軍二等兵 海軍三等兵 海軍四等兵

別表第三號表ヲ左ノ如ク改ム

第三號表

傷病原因	階等		准士官	下士官	兵
	甲	乙			
戰鬪又ハ戰鬪	第一	第一	判	一等	一等
鬪ニ準スヘキ公務	第二	第二	准	二等	二等
第一	第三	第三	士官	三等	三等
款	第四	第四	下士官	四等	四等
款	款	款	待	五等	五等
款	款	款	遇	六等	六等

別表第四號表ヲ左ノ如ク改ム

第四號表

號	甲		傷病原因	症狀等差	下士官	兵
	戰鬪	又ハ戰鬪				
第六目	第五目	第四目	第三目	第二目	第一目	第一
一六五	三三〇	四九五	六六〇	八二五	九九〇	九〇〇
一五〇	三〇〇	四五〇	六〇〇	七五〇	八五〇	九〇〇

  

號	乙		傷病原因	症狀等差	下士官	兵
	普通	公務				
第六目	第五目	第四目	第三目	第二目	第一目	第一
一三二	二六四	三九六	五二八	六六〇	七九二	七九〇
一一〇	二四〇	三六〇	四八〇	六〇〇	七三〇	七三〇

別表第四號表ヲ左ノ如ク改ム

第六條 第四十條ノ二ノ改正規定ハ本法施行ノ際現ニ進行中ニ屬スル休職、待命、歸休、停職其ノ他同條ニ規定スル迄本法施行後ト雖モ同條ノ規定ヲ適用セズ

第七條 傷病年金ハ本法施行後公務ノ爲傷病ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル者ニ之

第一條 本法ハ昭和八年十月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第四十六條ノ二及第五十

八條第一項第四號ノ改正規定ハ昭和九年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

恩給ニ付テハ仍從前ノ規定ニ依ル但シ

第五十八條第一項第四號ノ改正規定ハ本法施行前給與事由ノ生ジタル恩給ニ付テモ之ヲ適用ス

第三條 第十三條第二項但書ノ改正規定ハ本法施行前ヨリ行政裁判所ニ繫屬スル事件ニ付テハ之ヲ適用セズ

第四條 第十八條第一項ノ改正規定ニ依ル納付金額ハ同項ニ規定スル公務員ニ付テ附則第九條ノ規定ノ必要ナキニ至

ル迄ハ第十八條第一項ノ改正規定ニ拘ラズ同項ニ規定スル公務員ガ第五十九

条(改正前又ハ改正後)及附則第九條ノ規定ニ依リ納付スル金額ノ合計額ト同額トス

第五條 本法施行前ノ在職ニ付在職年ヲ計算スル場合ニ於テハ加算年又ハ休職等ノ減算ニ關スル改正規定ニ拘ラズ仍從前ノ規定ニ依ル

第六條 第四十條ノ二ノ改正規定ハ本法施行ノ際現ニ進行中ニ屬スル休職、待

命、歸休、停職其ノ他同條ニ規定ス

ル迄本法施行後ト雖モ同條ノ規定ヲ適

用セズ

第七條 傷病年金ハ本法施行後公務ノ爲傷病ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタル者ニ之

ヲ給ス但シ本法施行前賑恤金(之ニ準

ズルモノヲ含ム)又ハ傷病賜金ヲ受タ

ベキ事由ヲ生ジタル者ニハ本法施行前

其ノ事由ヲ生ジタルトキト雖モ勅令ノ

定ムル所ニ依リ傷病ノ程度ヲ査定シ將

來ニ向ツテ之ヲ給ス

第八條 第五十八條第一項第三號ノ改正規定ハ本法施行前普通恩給ヲ受クルノ

權利ヲ生ジタル者及本法施行ノ際現ニ

在職シ本法施行後退職シテ普通恩給ヲ

受クルノ權利ヲ生ズル者ニハ之ヲ適用

セズ

前項ニ規定スル者本法施行後再就職シ

其ノ改正恩給ヲ改定セラル場合ニハ

其ノ改定ニ因ル増額分ニ付第五十八條

第一項第三號ノ改正規定ヲ適用ス

第九條 第五十九條ノ改正規定ハ勅令ノ

定ムル所ニ依リ本法施行後就職シ又ハ

俸給(又ハ給料)ガ昇給若ハ増額セラレ

タル月ノ翌月ヨリ之ヲ適用ス

第十條 第五十九條ノ二第一項但書ノ場

合ニ於テ其ノ公務員が同一種類ノ公務

員トシテ實在職年二十年以上勤続シタ

ル者ニシテ特殊ノ事情アルモノニ付テ

ハ當分ノ内同但書各號ニ於ケル制限ノ

一級ヲ二級、百分ノ十五ヲ百分ノ三十

トス

第十一條 本法施行ノ際從前ノ規定ニ依

ル普通恩給ニ付テノ最短恩給年限ニ達

シタル者ニハ其ノ者ガ本法施行後改正

規定ニ依ル最短恩給年限ニ達セズシテ

退職シタル場合ト雖モ退職前ノ俸給ニ

依リ之ニ普通恩給ヲ給ス但シ其ノ年額

ハ在職年ノ不足一年ニ付退職前ノ俸給  
年額ノ百五十分ノ一ニ相當スル金額ヲ  
控除シタルモノトス

第十二條 前條ノ規定ハ本法施行ノ際現  
ニ休職、再服役其ノ他法令上ノ在職期  
限ノ定アル地位ニ在ル者ニシテ本法施  
行後其ノ期間ノ終了ニ因リ從前ノ規定  
ニ依ル普通恩給ニ付テノ最短恩給年限  
ニ達スルモノニ付之ヲ準用ス

第十三條 第六十四條ノ二ノ改正規定ハ  
本法施行前受ケタル一時恩給ニ付テハ  
之ヲ適用セズ

第十四條 第七十五條第二項ノ改正規定  
ハ公務員ガ本法施行前死亡シタル場合  
ニ付テモ之ヲ適用ス但シ此ノ場合ニ於  
ケル加給ハ本法施行後ニ屬スル殘存期  
間ニ付テノミ之ヲ爲ス

第十五條 恩給法施行前同法第二十三條  
ニ掲タル公務員トシテ普通恩給（退隱  
料）ヲ受ケ引續キ文官ニ任ジ同法施行  
後迄在職シタル後本法施行前退職シ同  
法第八十五條第一項ノ規定ノ適用ニ依  
リ其ノ普通恩給（退隱料）ヲ文官ノ普通  
恩給ニ改定セラレザリシ者ニ付テハ同  
項ノ規定ニ拘ラズ特ニ恩給法第九十條  
第一項ノ規定ヲ適用シ本法施行ノ日ヨ  
リ本法施行前ノ規定ニ依リ其ノ普通恩  
給（退隱料）ヲ文官ノ普通恩給ニ改定ス  
但シ恩給法施行後文官退職ニ因リ一時  
恩給ヲ受ケタル者ニ付テハ勅令ノ定ム  
ル所ニ依リ其ノ一時恩給ノ金額ヲ改定  
ニ因リ増額セラル普通恩給額中ヨリ  
支給ニ際シ控除ス

前項ノ規定ハ恩給法施行後本法施行前  
ニ文官トシテ普通恩給ヲ受ケタル者ニ  
控除シタルモノトス

第一項ニ規定スル者引續キ本法施行後  
迄在職スルトキハ恩給法第八十五條第  
一項ノ規定ヲ適用シ同法第二十三條第  
一項ノ規定ニ拘ラズ恩給法第九十條第  
一項ノ規定ニ付テハ同法施行後本法  
掲タル公務員トシテノ普通恩給（退隱  
料）ヲ文官トシテノ普通恩給ニ改定  
ス

第十六條 第九十一條第二項ノ改正規定  
ハ本法施行ノ際現ニ在職シ從前ノ同項  
ニ規定スル期間ヲ經過シタル者ニ付テ  
ハ之ヲ適用セズ

第十七條 本法施行ノ際現ニ在職シ恩給  
法第九十九條第一項ノ規定ノ適用ニ依  
リ同法第五十八條ノ規定ノ適用ヲ受ケ  
ザル者ノ恩給ノ停止ニ付テハ其ノ者ガ  
引續キ其ノ官職ニ在職スル期間ニ限り  
仍同法第九十九條第一項ノ規定ニ依ル  
八條ノ規定ノ適用ヲ受ケザリシ者又ハ  
前條ノ規定ノ適用ニ依リ同法第五十八  
條ノ規定ノ適用ヲ受ケザル者ノ當該在  
職期間ト他ノ公務員ノ在職年トノ通算  
ハ仍從前ノ例ニ依ル

第十九條 前條ニ規定スル者ヲ除クノ外  
恩給法第九十九條第一項ニ規定シタル  
者ノ大正十二年十月一日以後ノ在職年  
ハ同日以後ノ他ノ公務員ノ在職年ト互  
生ジタル場合ニ於テハ其ノ者ガ再就職

シ本法施行後退職又ハ死亡シタル場合  
ニ限り此ノ規定ニ依ル

前項ニ規定スル者ノ大正十二年九月三  
十日以前ノ在職年ノ同日以前ノ他ノ公  
務員ノ在職年トノ通算ニ付テハ同日以  
前ノ舊法ノ例ニ依ル

第一項ニ規定スル者ノ大正十二年十月  
一日前後ノ在職年ノ通算ニ關シテハ恩  
給法第九十條第一項ノ規定ヲ適用ス  
〔政府委員堀切善次郎君演壇ニ登ル〕

○政府委員（堀切善次郎君）唯今議題ト相  
成リマシタ恩給法中改正法律案ニ付キマシ  
テ、其提案ノ理由ヲ申上ゲタイト存ジマ  
ス、現行恩給法ハ、御承知ノ如ク大正十二  
年ニ整理統一セラレタノデアリマスガ、其  
後本法中ニ存シマス色ミノ不備ノ點ト、行  
政整理其他ノ原因トニ依リマシテ、恩給總  
額ハ年々累増ノ一途ヲ辿リマシテ、昨年ノ  
末ニ於キマシテハ、國庫ヨリ支給イタスモノ  
バカリデ約一億四千七百萬圓ニ上ボリマシ  
タ、而シテ毎年ノ累増額ハ平均一年約四百  
萬圓ニ達スル狀況デアリマシテ、財政上カ  
タ考ヘマシテモ輕視出來ナイ状態ナノデア  
リマス、此儘ニ放任イタシマスレバ、恩給  
總額ハ増加スルバカリデアリマシテ、果シ  
テ何年後ニ此趨勢ガ緩和、又ハ停止出來ル  
カト云フコトハ、チヨット判断ノ付カナイ狀  
況ニナフテ居ルノデアリマス、斯ク恩給總額  
ハ累年遞増イタシマスガ、翻テ之ヲ受ケ  
ル個人ノ側カラ見マスレバ、中ニハ十分ノ  
イタシマス

○子爵清岡長言君 贊成

○議長（公爵德川家達君）池田子爵ノ動議  
ニ御異存ゴザイマセヌカ

〔異議ナシ」ト呼フ者アリ〕

○議長（公爵德川家達君）御異議ナイト認  
メマス、本案ノ特別委員ノ氏名ヲ書記官ヲ

ケ又ハ疾病ニ罹リテ職ヲ罷メタ者及ビ其遺  
族ノ一部等ニハ、給與ガ薄キニ過ギルト認  
メラレルモノモアルノデアリマス、以上ノ  
理由ニ依リマシテ、今回ノ提案ニ於キマシ  
テハ、一面現受恩給者、又ハ近ク恩給ヲ受  
クルニ至ルベキ人ミニ對シマシテハ、餘リ  
苦痛ヲ與ヘナイ方法ニ依リマシテ、恩給總  
額ノ年々ノ膨脹ノ趨勢ヲ防止イタシマシ  
テ、財政上ノ不安ヲ除去イタシマスト共  
ニ、他面現行法中ニ存シマスル不備不當ノ  
點ヲ整理イタシマシテ、尙ホ萬已ムヲ得ザ  
ル者ニ付キマシテハ、幾分恩給ノ増額ヲ  
圖フタ次第デアリマス、政府ノ見ル所ヲ以  
テシマスレバ、突發事件ノアリマセヌ限  
リ、此改正ニ依リマシテ四五年ノ後ニハ其  
累增ヲ停止スルコトガ出來、其後ハ幾分宛  
ナリトモ恩給總額ノ漸減ヲ見ル見込デアリ  
マス、詳細ニ付キマシテハ委員會ニ於テ申  
上ゲルコトト致シマス、何卒御審議ノ上御  
協賛アラムコトヲ望ム次第デアリマス

○子爵池田政時君 只今議題ニ上ボリマシ  
タ恩給法中改正法律案ハ、重要ナ法案デア  
リマスガ故ニ、此特別委員ノ數ヲ十五名ト  
シ、其指名ヲ議長ニ一任スルノ動議ヲ提出





デアリマスル、從テ當路者ノ諧間サレタ所ノ原案ノ精神ハ、能ク此法案ノ中ニ現ヘレスル、此案デアリマスルノデアリマスル、尙ホ當業者ノ最モ重要ナリトスル所ノ其原則精神ハ、此案ノ中ニ十分ニ含マレテ居ルノデアリマスル、此案デアリマスルノデアリマスルバ、最初此原蠶種國家管理ト云フコトヲ實行スルコトノ極メテ必要ナルコトヲ御認メニナフテ、サウシテ其準備トシテ諸間セラレタル所ノ政府トシテハ、無論是ハ喜ンデ御採擇ニナルベキモノト信ジテ疑ハナイノデアリマス、ソレヘ此案ノ詳細ニ亘リマシテ御話ヲ申上ゲマスルコトハ、非常ニ御退屈ヲ招クカトモ考ヘマスルガ、先ヅ原蠶種ト云フモノヲ國デ以テ製造イタシマシテ、サウシテ原原種ノ次ニ第二代目ノ原蠶種ト云フモノガアルノデアリマスル、原蠶種ハ種屋ガ……蠶種製造家ガ養蠶家ニ種ヲ分ツガ爲ニ、自分ノ方デ銅フ所ノ原種デアリマス、其原種ハ大體ト致シマシテ、各府縣ノ蠶種製造所ニ之ヲ作ラセテ當業者ニ分ツト云フヤウナ意味ニナフテ居ルノデアリマス、併ナガラ其各府縣ノ蠶業試驗場以外ニ技術優秀ニシテ設備ガ備ハリマシテ、サウシテ自分デ原蠶種ヲ作りタガト云フノデアリマス、サウ致シマシテ、此蠶種製造家ハ國ノ原原種カラ製造サレテ、府縣ノ手ヲ經テ分タレタルモノ、或ハ國カラ直ニ原種ヲ受取テ、自ラ製造シタル所ノ原

ニ分配スベキ所ノ普通蠶種ヲ製造シテ、全國的ニ配付スルノデアリマスルカラ、此蠶種ノ統一ノ目的ハ十分ニ達セラレルノデテハ、原原種ヲ配付スルト云フコトノ此ヤアリマシテ、而モ國ガ縣ニノミ依ラズシテ、技術優秀ニシテ設備ノ完全ナルモノニ向、良イ蠶種ヲ作ル上ニ付テハ大變結構ナ仕組ダト考ヘテ居リマス、斯ノ如クシテ此蠶種ヲ統制シマシタ晚ニ於キマシテハ、今此各府縣、全國ニアル所ノ蠶ノ種類ガ澤山ニナリマンテ、其作ラレタル繭ガ區々ニナ、テ居ルガ爲ニ、其出來タ所ノ絲ガ大變複雜デ統一サレテ居ナイ爲ニ、需要者側ノ米國若クハ其他ノ國カラ大變叱言ヲ受ケテ居リマスルノガ、此全國ヲ統一シタル所ノ立派ナル蠶種ニナル曉ニ於キマシテハ、日本ノ蠶ノ繭ハ全然統一サレマシテ、製絲家ガ之ヲ採用シテ絲ヲ引イテ外國ニ出ス上ニ於テ、非常ニ優秀ナル所ノ立場ニナルノデアリマス、此意味カラシテ此案ガ既ニ衆議院ノ提出トナリマシタ以上、願ハクバ本院ノ諸公モ此案ノ重要性ヲ御認メ戴キマシテ、之方成立通過ヲ御圖リ下サリマスルヤウニ御願ヒシマスルト同時ニ、政府ニ向テハ是非是ガ採擇ヲ希望シテ已マナイ所以デゴザイスマル、然ルニ動モスレバ斯ウ云フ論ガアルデハナイカト思ヒマスル、何カト申シマスルト、此原蠶種ト云フモノハ、國デ十分ナル研究ヲシテ優秀ナル蠶種ヲ出ダスト云

フコトニ努メテ居ルガ、今後ノ養蠶ト云フモノハ必シモ絲量ガ多クテ品質ノ良イモノダケデハイカナイデアラウ、無論ソレモ必要デアリマセウケレドモ、養業界ノ大勢、カラ織物ニ作ルト云フ其過程ハ、今後多大ノソコニ變態ガ生ズルノデハナイカト云フアルデハナイカ、繭カラ絲ニシナシテ、絲コトヲ考ヘテ置カナケレバナラナイ、ソレハ成ルベク安イモノデ以テ、各國ト競争スル上ニ於テ、又人造絹絲ト對抗スル上ニ於キマシシテハ、品質ガ良タテ成ベク安イモノヲ出サナケレバナラナイ、其場合ニ於キマシテ、徒ニ製絲ノ工程ヲ經テ澤山ノ金ヲ掛ケルヨリモ、寧ロ繭カラ直ニ織物ト……繭カラ織物ト云フ譯ニハ行キマセヌガ、其繭カラ製絲上ノ工程ヲ經ズシテ、直ニ人造絹絲若タハ此生絲ノ織物ノヤウナ過程ヲ經マシテ、極ク簡単ニ仕上ゲル必要ガアルノデアル、ソレデ今日マダ完全ナル成案ヲ得テ居ルト云フ譯デアリマセヌガ、此事ニ付テハ色ニ研究サレテ居リマシテ、最モ簡単明瞭ニ其一例ヲ舉ゲテ申シマスナラバ、繭ヲ丸ク作フテ、ソレヲ絲ニ繰ッテ、非常ニ澤山ノ費用ヲ掛ケテヤルト云フコトハ、ソレモノラズニ平タク、平繭、繭ヲ作ルノハ自分必要デアラウガ、今後ソレニノミ依テ居ルコトハ出來ナイカラ、其繭ノ絲ヲ、繭ヲノ費用ヲ掛ケテヤルト云フコトハ、ソレモノラズニ平タク、平繭、繭ヲ作ルノハ自分ノ巢ヲカケル爲ニ作ルノデアリマスガ、蠶ハ絲ヲ澤山身體ノ中ニ拘ヘテ居ル以上、其蛹ニナル迄ニハ其絲ヲ吹出サナケレバナラ

ナイカラ、此繭ヲ作セルヤウナ仕掛ヲ止メテシマツテ、板ノ上若クハ平タイ蠶座ノ上ニ置キマシテ平繭ヲ作ラセテ、蛹ハ蛹、絲ハ絲ト別ニ吐キ出サセテシマツテ、サウシテ又絹紡績ノ紡績絲ヲ造ルヤウナ風ニ、織ヲ絲ニシナスヤウナ過程デ、極ク容易ク安クヤルト云フコトガ、今後ハ必要デハナイカト云フコトヲ考へマシテ居ルノデアリマス、其他色ニ是ハ研究サレツツ居リマスガ、必ず良イ方法ガ出來ルト思ヒマス、斯ノ如キ場合ニ於テハ、單ニ品質ガ良クテ其絲量方多イト云フコトノミナラズ、成ルベク蠶方強健性ヲ帶ビテ居ラテ、サウシテ其目的ニ堪ヘルモノデアレバ宜シイト云フノデアリマスルガ、斯ウ云フコトモアルノデアルカラ、今専ラ優良蠶種ヲ造ル所ノ原蠶種製造ト云フコトハ、其必要ガ少タルノデハナイカト云フヤウナ疑ヒモアリマスルガ、斯ノ如キ色ニノ變化ガアレバコソ、唯今迄ノヤウナ方法ニノミ執著セズシテ、此國ノ、原蠶種國家管理ト云フモノガ成立アテ居リマスル曉ニ於キマシテ、其必要ニ應ジテ直ニ方針ヲ其點ニ轉向スルコトガ自由自在ニ出來ルノデアリマス、此點ニ付キマシテハ寧ロ原蠶種國家管理ノ一日モ早ク出來ルコトカラ或ハ此事ヲ施行スル爲ニヘ國費多端ノ折柄、尙ホ非常ニ澤山ノ金ガ要ルノヂヤナカ、或ハ一千萬圓要ルデアラウ、或ハ八



### ニ關スル事業

#### 三 清潔保持ニ關スル事業

四 其ノ他公衆衛生上必要ナル事業

衛生組合ハ行政官廳又ハ市長ノ指示ヲ

承ケ前項ノ事業ニシテ國、道府縣又ハ

市ニ屬スル事務ヲ補助スルコトヲ得

第四條 衛生組合ノ區域ハ市内ニ於テ市

長之ヲ定ム

第五條 衛生組合ハ其ノ區域内ノ世帯主

ヲ以テ其ノ組合員トス

衛生組合ハ組合規約ノ定ムル所ニ依リ

前項ニ掲グル者ノ外組合區域内ニ學校、

病院、工場、倉庫、營業所又ハ事務所

等ヲ設クル者ヲ組合員ト爲スコトヲ得

但シ國、道府縣、市町村其ノ他之ニ準

ズベキモノハ此ノ限ニ在ラズ

第六條 衛生組合ヲ設立セントスルトキ

ハ其ノ區域内ノ組合員タル資格ヲ有ス

ル者七人以上發起人ト爲リ組合規約ヲ

作成シ組合員タル資格ヲ有スル者二分

ノ一以上ノ同意ヲ得テ地方長官ノ認可

ヲ受クベシ

第七條 地方長官必要アリト認ムルトキ

ハ市長ニ對シ區域ヲ指定シ衛生組合ノ

設立ヲ命ズルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ衛生組合ノ設立ヲ命

ゼラレタル市長ハ組合規約ヲ作成シ地

方長官ノ認可ヲ受クベシ

第八條 衛生組合ハ組合規約ノ定ムル所

ニ依リ總會ヲ開キ組合ニ關スル事件ヲ

議決ス但シ命令ノ定ムル所ニ依リ代會

ヲ以テ總會ニ代フルコトヲ得

總會ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定

ム

第九條 衛生組合ニ組合長及副組合長一

人又ハ二人ヲ置ク

組合長及副組合長ハ組合員中ヨリ之ヲ選

前項ノ選舉ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ

之ヲ定ム

組合長及副組合長ノ外組合規約ノ定ム

ル所ニ依リ衛生組合ニ他ノ役員ヲ置ク

コトヲ得

第十條 組合長ハ組合ヲ代表シ組合一切

ノ事務ヲ擔任ス

副組合長ハ輔佐シ組合長事故

アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

副組合長二人アルトキハ豫メ組合長ノ

定メタル順序ニ依リ之ヲ代理ス

第十一條 衛生組合ノ經費ハ組合規約ノ

定ムル所ニ依リ組合員之ヲ負擔ス

第十二條 組合規約ヲ變更セントスルト

キハ市長ヲ經テ地方長官ノ認可ヲ受ク

ヲ受クベシ

第十三條 地方長官ハ衛生組合ニ對シ監

督上必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲

スコトヲ得

市長ハ衛生組合ニ對シ事務ノ報告ヲ爲

サシメ、書類帳簿ヲ徵シ、實地ニ就キ

事務ヲ視察シ若ハ出納ヲ検査シ又ハ事

業ニ關シ必要ナル事項ヲ指示スルコト

及前項ノ衛生組合ニ對シ清潔方法、消

毒方法其ノ他傳染病ノ豫防救治ニ關シ

國ハ必要ノ場所ニ少年教護院ヲ設置ス

第十四條 地方長官ハ總會ノ議決若ハ選

舉又ハ役員ノ行爲ガ法令若ハ組合規約

ニ違反シ又ハ公益ヲ害スト認ムルトキ

ハ議決若ハ選舉ヲ取消シ、役員ヲ解任

シ、組合ノ事業ヲ停止シ又ハ組合ノ解

散ヲ命ズルコトヲ得

第十五條 衛生組合ノ解散、分合及區域

變更ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定

ム

組合長及副組合長ノ外組合規約ノ定ム

ル所ニ依リ衛生組合ニ他ノ役員ヲ置ク

コトヲ得

第十條 組合長ハ組合ヲ代表シ組合一切

ノ事務ヲ擔任ス

副組合長ハ輔佐シ組合長事故

アルトキハ其ノ職務ヲ代理ス

副組合長二人アルトキハ豫メ組合長ノ

定メタル順序ニ依リ之ヲ代理ス

第十一條 衛生組合ノ經費ハ組合規約ノ

定ムル所ニ依リ組合員之ヲ負擔ス

第十二條 組合規約ヲ變更セントスルト

キハ市長ヲ經テ地方長官ノ認可ヲ受ク

ヲ受クベシ

第十三條 地方長官ハ衛生組合ニ對シ監

督上必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲

スコトヲ得

市長ハ衛生組合ニ對シ事務ノ報告ヲ爲

サシメ、書類帳簿ヲ徵シ、實地ニ就キ

事務ヲ視察シ若ハ出納ヲ検査シ又ハ事

業ニ關シ必要ナル事項ヲ指示スルコト

及前項ノ衛生組合ニ對シ清潔方法、消

毒方法其ノ他傳染病ノ豫防救治ニ關シ

國ハ必要ノ場所ニ少年教護院ヲ設置ス

必要ナル事項ヲ指示シテ之ヲ履行セシ

ム

市町村ハ衛生組合法ニ依ル衛生組合及

第一項ノ衛生組合ニ於テ傳染病ノ豫防

救治ノ爲支出スル費用ノ全部又ハ一部

ヲ補助スルコトヲ得

第二十四條中「第二十三條第二項」ヲ「第

二十三條第三項」ニ改ム

本法施行ノ期日ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

○議長(公爵德川家達君)此兩案ハ六大阪

市ニ特別市制實施ニ關スル法律案ノ特別委

員ニ供託イタシマス

前項地方長官ノ指定シタル衛生組合ハ違

滯ナク組合規約ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ

ノト看做ス

前項地方長官ノ指定シタル衛生組合ハ違

滯ナク組合規約ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ

ノト看做ス

○議長(公爵德川家達君)日程第十二、少

年教護法案、衆議院提出、第一讀會

右本院提出案及送付候也

昭和八年三月九日

傳染病豫防法中改正法律案

貴族院議長公爵德川家達殿

貴族院議長公爵德川家達殿

貴族院議長公爵德川家達殿

貴族院議長公爵德川家達殿

貴族院議長公爵德川家達殿

貴族院議長公爵德川家達殿

貴族院議長公爵德川家達殿

貴族院議長公爵德川家達殿

貴族院議長公爵德川家達殿

本法施行ノ期日ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

○議長(公爵德川家達君)此兩案ハ六大阪

市ニ特別市制實施ニ關スル法律案ノ特別委

員ニ供託イタシマス

前項地方長官ノ指定シタル衛生組合ハ違

滯ナク組合規約ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ

ノト看做ス

○議長(公爵德川家達君)日程第十二、少

年教護法案、衆議院提出、第一讀會

右本院提出案及送付候也

昭和八年三月九日

傳染病豫防法中改正法律案

貴族院議長公爵德川家達殿

本法施行ノ期日ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

○議長(公爵德川家達君)此兩案ハ六大阪

市ニ特別市制實施ニ關スル法律案ノ特別委

員ニ供託イタシマス

前項地方長官ノ指定シタル衛生組合ハ違

滯ナク組合規約ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ

ノト看做ス

○議長(公爵德川家達君)日程第十二、少

年教護法案、衆議院提出、第一讀會

右本院提出案及送付候也

昭和八年三月九日

傳染病豫防法中改正法律案

貴族院議長公爵德川家達殿

本法施行ノ期日ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

○議長(公爵德川家達君)此兩案ハ六大阪

市ニ特別市制實施ニ關スル法律案ノ特別委

員ニ供託イタシマス

前項地方長官ノ指定シタル衛生組合ハ違

滯ナク組合規約ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ

ノト看做ス

○議長(公爵德川家達君)日程第十二、少

年教護法案、衆議院提出、第一讀會

右本院提出案及送付候也

昭和八年三月九日

傳染病豫防法中改正法律案

貴族院議長公爵德川家達殿

本法施行ノ期日ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

○議長(公爵德川家達君)此兩案ハ六大阪

市ニ特別市制實施ニ關スル法律案ノ特別委

員ニ供託イタシマス

前項地方長官ノ指定シタル衛生組合ハ違

滯ナク組合規約ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ

ノト看做ス

○議長(公爵德川家達君)日程第十二、少

年教護法案、衆議院提出、第一讀會

右本院提出案及送付候也

昭和八年三月九日

傳染病豫防法中改正法律案

貴族院議長公爵德川家達殿

本法施行ノ期日ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

○議長(公爵德川家達君)此兩案ハ六大阪

市ニ特別市制實施ニ關スル法律案ノ特別委

員ニ供託イタシマス

前項地方長官ノ指定シタル衛生組合ハ違

滯ナク組合規約ヲ定メ地方長官ノ認可ヲ

ノト看做ス

○議長(公爵德川家達君)日程第十二、少

年教護法案、衆議院提出、第一讀會

右本院提出案及送付候也

昭和八年三月九日

傳染病豫防法中改正法律案

貴族院議長公爵德川家達殿

本法施行ノ期日ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

國立教護院ニハ教護事務ニ從事スル職

員養成所ヲ附設スルコトヲ得

### 第三條 少年教護院ニ於ケル教護ノ本

### 旨、教科、設備及職員ニ關スル事項ハ

勅令ヲ以テ之ヲ定ム

道府縣ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ

少年鑑別機關ヲ設置スルコトヲ得

第五條 道府縣ノ設置スル少年教護院及

少年別機關八地方長官、國立少年教

護院ハ内務大臣之ヲ管理ス

第六條 道府縣ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ

少年教養ノ爲少年教養委員ヲ置クベシ

第七章  
國道府縣三俳ザル著本法ニ該ル

敵襲ヲ目的トスレ少手敵襲完ヲ設置セ

ノトハシ、チ、内務大臣の認可ヲ受ク

卷之三

卷之三

第六八條

ル者アルトキハ之ヲ少年教護院ニ入院

セシムバシ

一 少年ニシテ不良行爲ヲ爲シ又ハ不

良行爲ヲ爲ス處アリ且適當ニ親權又

八後見ヲ行フモノナキ者

## 二 少年ニシテ親權者又ハ後見人ヨリ

## 入院ノ出願アリタル者

### 三 少年審判所ヨリ送致セラレタル者

スル者ニ對シ前項ノ處分ノ外適當ナル  
施設若ハ家庭ニ委託シ又ハ少年教護委  
員ノ監督ニ付スルコトヲ得  
第九條 内務大臣ハ前條第一項第一號又  
ハ第二號ニ掲グル者左記各號ノ一ニ該  
當スルトキハ之ヲ國立教護院ニ入院セ  
シムルコトヲ得  
一 性狀特ニ不良ニシテ地方長官ヨリ  
入院ノ申請アリタル者  
二 前號ニ該當セズト雖特ニ入院ノ必  
要アリト認メタル者  
第十條 地方長官必要アリト認ムルトキ  
ハ少年教護院ヲ退院シタル者ニ對シ適  
當ノ保護監督ヲ行フベシ  
第十一條 内務大臣又ハ地方長官必要ア  
リト認ムルトキハ前三條ノ處分ヲ解除  
シ又ハ變更スルコトヲ得  
第十二條 第八條乃至第十條ノ規定ニ依  
ル處分ハ其ノ處分ヲ受タル者滿二十歳  
ニ達スル迄之ヲ繼續スルコトヲ得  
第十三條 學校長、市町村長、少年教護  
委員又ハ警察署長第八條第一項第一號  
ニ該當スル者アリト認ムルトキハ之ヲ  
地方長官ニ具申スベシ  
第十四條 地方長官、警察署長又ハ市町  
村長必要アリト認ムルトキハ第八條第

一項第一號ニ該當スル者ノ處分決定ニ至ル迄一時保護ノ爲適當ナル施設若ヘ家庭ニ委託スルコトヲ得仍警察署長ニ於テ特ニ必要アリト認ムルトキハ五日ヲ超エザル期間假ニ留置ヲ爲スコトヲ得  
前項ニ依リ警察署長ニ於テ行フ留置ハ他ノ收容者ト分離スベシ  
第十五條 少年教誨院長ハ在院者ニ對シ親權ヲ行フ但シ親權者又ハ後見人アル者ノ財產管理ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ  
第十六條 内務大臣又ハ地方長官ハ本人又ハ扶養義務者ヨリ在院委託及一時保護ニ要シタル費用ノ全部又ハ一部ヲ徵収スルコトヲ得  
前項費用ノ徵収ハ必要ニ應ジ納付義務者ノ居住地又ハ財產所在地ノ地方長官又ハ市町村長ニ之ヲ囑託スルコトヲ得  
第一項ノ費用ヲ指定ノ期限内ニ納付セザル者アルトキハ國稅徵収法ノ例ニ依リ處分スルコトヲ得  
第十七條 第八條乃至第十一條ノ處分ヲ受ケタル者ノ親族又ハ後見人ハ入院後六箇月ヲ經過シタル場合其ノ處分ノ解除又ハ變更ヲ内務大臣又ハ地方長官ニ除

第十八條 第八條第九條第十一條又ハ第十六條第一項及第三項ノ處分ニ不服アル者及前條ノ出願ヲ許可セラレザル者ハ訴願ヲ提起スルコトヲ得  
第十九條 道府縣ノ設置スル少年教護院及少年鑑別機關第十條ノ保護監督少年教護委員一時保護及地方長官ノ爲シタル委託ニ關スル費用ハ道府縣ノ負擔トス  
市町村長第十四條ノ一時保護ヲ爲シタルトキハ其ノ費用ハ市町村費ヲ以テ一時之ヲ立替フベシ  
第二十條 國庫ハ前條第一項ノ規定ニ依ル道府縣ノ支出ニ對シ勅令ノ定ムル所ニ依リ四分ノ一乃至二分ノーフ補助ス  
第七條ノ規定ニ依リ認可セラレタル少年教護院ノ支出ニ付亦前項ヲ適用ス  
第二十一條 第七條ノ規定ニ依リ認可ヲ受ケタル少年教護院ノ用ニ供スル土地建物ニ對シテハ地方稅ヲ課セズ但シ有料ニテ之ヲ使用セシメタル者ニ對シテハ此ノ限ニ在ラズ  
第二十二條 内務大臣及地方長官ハ第七條ノ規定ニ依リ認可ヲ受ケタル少年教護院ヲ監督シ之ガ爲必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得

第二十三條 第七條ノ規定ニ依リ認可セラレタル少年教護院本法若ハ本法ニ基キ發スル命令又ハ認可ノ條件ニ違反シタルトキハ内務大臣ハ認可ヲ取消スコトヲ得

二十四條 少年教護院長ハ在院中所定ノ教科ヲ履修シ性行改善シタル者ニ對シテハ其ノ退院後ニ於テ尋常小學校ノ教科ヲ修了シタル者ト認定スルコトヲ得但シ少年教護院ノ教科ハ小學校令ニ遵據シ文部大臣ノ承認ヲ經ルコトヲ要ス

前項ノ認定ヲ受ケタル者ハ他ノ法令ノ適用ニ關シテハ小學校ヲ卒業シタル者ト看做ス

二十五條 本法中町村又ハ町村費トアルハ町村制ヲ施行セザル地ニ在テハ之ニ準ズベキモノトス

二十六條 少年ノ教護處分ニ付セラレタル事項ハ之ヲ新聞紙其ノ他ノ出版物ニ掲載スルコトヲ得ズ

前項ノ規定ニ違反シタルトキハ新聞紙ニ在リテハ編輯人及發行人、其ノ他ノ出版物ニ在リテハ著作者及發行者ヲ三月以下ノ禁錮又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

#### 附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム  
感化法ハ之ヲ廢止ス

少年法ニ依ル保護處分ノ實施セラレザル地區ニ限リ第一條第一項ノ年齢ハ之ヲ十八歳未滿トス

貴族院議事速記録第二十一號正誤

二〇一	頁 段 行	誤
三	三五	配付及
		正

本法施行ノ際現ニ存スル國立感化院及道府縣立感化院ハ之ヲ本法ニ依リ設置シタマ第7條ノ規定ニ依リ認可ヲ受ケタル少年教護院ト看做シ其ノ在院者ハ之ヲルモノハ之ヲ本法ニ依リ入院セシメラレタルモノト看做ス

本法施行ノ際現ニ存スル代用感化院ハ之ヲ第7條ノ規定ニ依リ認可ヲ受ケタル少年教護院ト看做シ其ノ在院者ニシテ感化法第五條ノ規定ニ依リ入院セシメラレタルモノハ之ヲ本法ニ依リ入院セシメラレタルモノト看做ス

本法施行ノ際道府縣立感化院ノ設置ナキ道府縣ハ本法施行ノ日ヨリ五年以内ニ少年教護院ヲ設置スルコトヲ要ス

○議長(公爵徳川家達君) 是ニテ本日ノ議事日程ハ終リマシタ、次ノ議事日程ハ決定次第報ヲ以テ御通知ニ及ビマス、本日ハ是ニテ散會

午前十時五十九分散會

官報號外 丙午八年三月十一日 費族完議事速記卷第二十三號

一八〇